

シリーズ「遺跡を学ぶ」

170

# 縄文の 山岳農耕民 井戸尻遺跡群

樋口誠司

新泉社



# 縄文の山岳農耕民

—井戸尻遺跡群—

樋口誠司

【目次】

第1章 八ヶ岳山麓の縄文遺跡……………4

第2章 おらあとうの考古学……………11

1 おらあとうの村の遺跡発掘……………11

2 おらあとうの村の井戸尻編年……………20

第3章 井戸尻文化の中心地……………25

1 八ヶ岳南麓の井戸尻文化……………25

2 井戸尻文化とは何か……………35

第4章 山岳農耕民のくらし……………42

1 藤森栄一の縄文農耕論……………42

2 遠山郷で学んだこと……………44

3 縄文農耕を支えた石器群……………46

4 列島につらなる新石器製作技術……………56

5 パン状炭化物の発見……………60

第5章 縄文図像学の世界……………67

1 縄文土器の図像学……………67

2 縄文の神話と富士眉月弧……………84

3 高原の縄文王国収穫祭……………90

編集委員  
勅使河原彰(代表)  
小野 昭  
小野 正敏  
石川日出志  
小澤 毅  
佐々木憲一

装 幀 新谷雅宣  
本文図版 松澤利絵

おもな参考文献……………92

# 第1章 八ヶ岳山麓の縄文遺跡

## 山麓の自然と環境

本州のほぼ中央に位置する八ヶ岳。赤岳を主峰とする標高三〇〇〇メートル級の山岳はさまざまな形容をなし、南北方向に長く連なる。そして成層火山特有のゆるやかな裾野を広げ、標高八〇〇から一三〇〇メートル前後の高原地帯を形成している(図1)。

その裾野の末端は、フォッサマグナの西端にあたる糸魚川―静岡構造線に沿って走る釜無川かまなしや宮川みやなどによって区切られ、JR中央本線の富士見駅から西へ二キロあたりが分水嶺で、いくつかの支流をとり込んで富士川と天竜川へそれぞれ流れ下っている。

この東西一〇キロ、南北二〇キロにおよぶ広大な裾野は、大小の河川や沢によって仕切られ長峰状の地形をなし、ここらあたりではそれを「尾根」とよぶのが一般的である。そして立場たっぱ川を境に、尾根が西にむく地域を西麓、南にむく地域を南麓とよび分け、両者をあわせて八ヶ岳西南麓とよんでいる。

この八ヶ岳西南麓には縄文時代の遺跡が数多くあって、標高八〇〇から一〇〇〇メートルの裾野をとり巻くように尾根の平坦部や縁辺に残されている(図2)。なかでも縄文中期の遺跡が密集していることはよく知られており、とりわけそのなかでも、ここ富士見町を中心にした杜市ほくと、原村はらむら、茅野市ちのにおよぶ一帯は、発掘された集落跡やさまざまな器種からなる石器や土器造形などから、高い文化水準を有していたことがわかってきた。

## 核となる四つの地域

二〇〇四年の夏から秋にか



図1・「縄文王国」の中心舞台

矢印が井戸尻遺跡。井戸尻遺跡群はそこを中心に3kmほどの範囲(写真の右端から左端を少しはみ出す程度)に広がっている。手前を流れるのは釜無川。

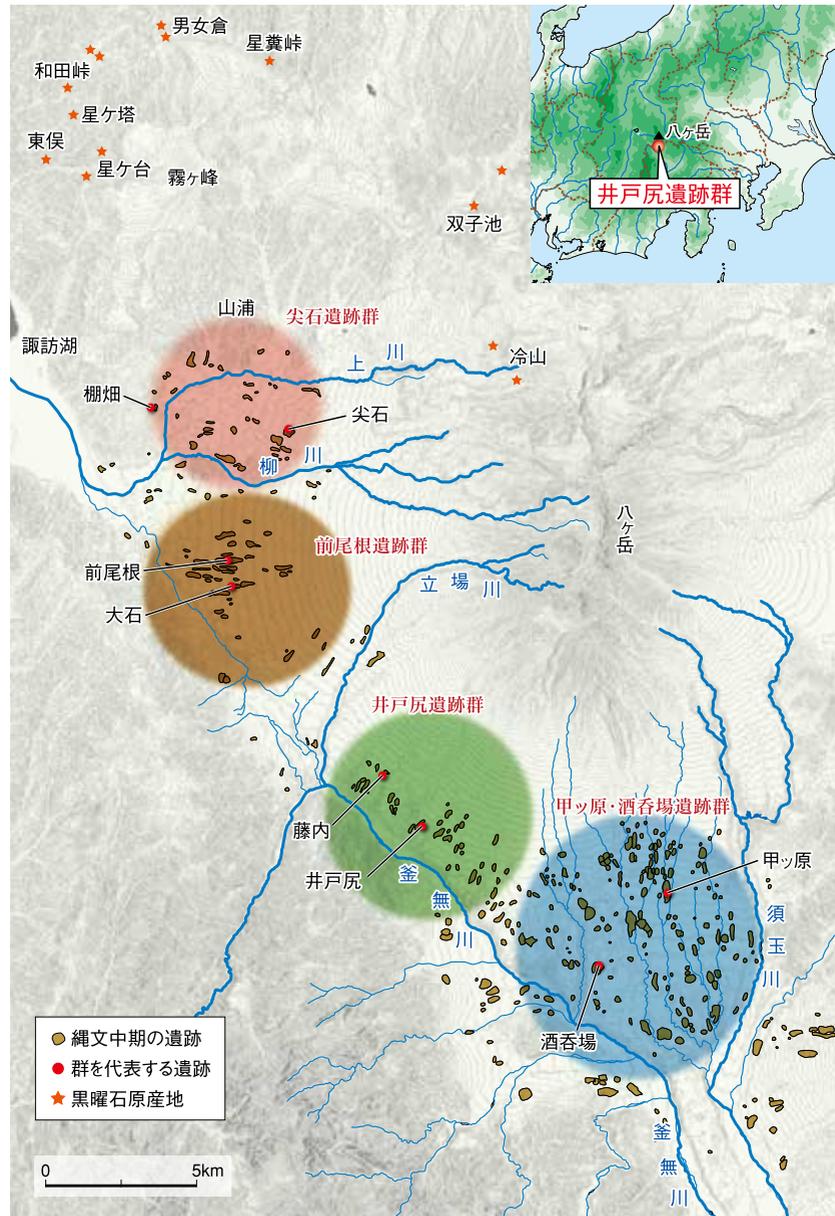


図2 ● 八ヶ岳西南麓の縄文中期の4つの核地域と井戸尻遺跡  
八ヶ岳南麓には星団のように多数の遺跡があり、なかでも井戸尻遺跡群は土器造形をはじめ文化の中心であった。

けて井戸尻考古館が開催した「井戸尻発掘三十周年記念」の座談会では、八ヶ岳西南麓を中心に甲府盆地、諏訪湖周域、松本平、伊那谷にいたる、前期から晩期までの遺跡を六区一三群としてまとめた。

このうち北杜市、富士見町、原村、茅野市の西南麓一帯には三〇〇カ所以上の縄文遺跡が存在し、大きく四つの区域に分けられることを確認した(図2)。これを南麓側から眺望すると、つぎのようになる。なお、各群の名称は、群を代表する中期の遺跡名をふしている。

① 甲ヶ原・酒呑場遺跡群・茅ヶ岳西麓域にあたる北巨摩郡の地域。須玉川や塩川、釜無川をまたいで遺跡が広がっている。

② 井戸尻遺跡群・八ヶ岳南麓。北は立場川、南は鹿ノ沢川にはさまれた編笠山麓の地域。尾根は西から南にむく。

③ 前尾根遺跡群・八ヶ岳西麓。中・小河川によって開析されたならかな長尾根が特徴の地形で、尾根は西へむく。

④ 尖石遺跡群・八ヶ岳西麓。柳川を境にして、その北側の山浦地域。八ヶ岳と霧ヶ峰の山塊にかこまれた袋状の地理的景観を有する。

これら四地域には、後で紹介するように縄文中期はもとより、前期、それに後・晩期の主要な遺跡が存在することも重要な要素として記憶しておかなければならない。連綿として集落は継起して、星団のように遺跡群を遺している。それなりに血脈はつづいて、幾世代にもわたって文化を遺し、その時間の厚みが地域の固有な歴史を形づくっているのである。

### 山岳民族というところ

これらの遺跡を遺した人びとについて、著名な考古学者鳥居龍蔵は、一九二四年（大正一三）刊行の『諏訪史』第一巻で、「器肉の厚い土器を厚手派と呼び、山岳地帯に住む厚手派民衆または山岳住民だ」と記している。また別の論文では「山岳狩猟民」という用語を用いて中部高地の遺跡群をとらえている。こうした考えにおよんだのは、鳥居みずからがおこなった台湾の民族調査が背景にあった。

諏訪を代表する在野の考古学者で諏訪考古学研究所を主宰し、井戸尻遺跡群の発掘調査で中心的役割を担うことになる藤森栄一は、一九四七年の「器具の発展について」（未発表、『藤森栄一全集』一五巻〈学生社、一九八五年〉に所収）のなかで、つぎのように述べて、山岳地方と海岸地方を対比して生業の差をとらえようとした。

「しかしながら、そのうちにあっても山岳地方に集団し、草原や森林の環境におかれた人々と、海岸地方に盤踞して海浜や沼沢の環境を与えられた人々とは、これが果たして同じ文化期に消長した生活であろうかと疑わせるほどにも相違しているのである。」

同じく諏訪出身で東京教育大学や上智大学の教授であった考古学者の八幡一郎は、一九六四年の「勝坂式文化圏の中心」（『信濃』一六巻五号）で、相模原台地の勝坂遺跡で発掘された勝坂式土器について、「本州中部の山地帯、殊に関東山脈・赤石山脈並びに木曾山脈などの南走する山脈が形成する山地に拡がっているものであるから、中央脊稜山脈の南斜面に位置する」と、その分布の特徴を記している（図3）。この八幡が唱えた「勝坂式文化圏」は、鳥居が示

した「山岳狩猟民」文化にあたるといつてよいだろう。

一方、民俗学者の宮本常一は「山と人間」（『民族学研究』三二巻四号、一九六八年）で、近畿から四国、九州地方にいたる、水田をもたずに焼畑・定畑をして生計をたて、緩傾斜面に生活する民族を、「山岳民」ととらえている。なかでも遠山郷とよばれている長野県下伊那郡下栗集落をとりあげ、峡谷の緩傾斜地での生活を山岳民であると述べている。

これらのことから、表現の差はあれ、かつての学者たちは、「信州は山国である」「山に暮らす人びとの文化があった」という共通した認識をもっていたことがわかる。

### 峠を越えるところ

たしかに鉄道にしる陸道にしる、都内の高層ビル群を背に信州へとむかうと、高尾あたりからいくつかのトンネルを過ぎて、相模湖あたりになると田畑は少なくなり、山深くなつてゆく。桂川に沿って山峡を抜け笹子峠にいたると、山に來たなと実感する。そして、長く深い峠を越えると視界が開け、甲府盆地を一望することができる。

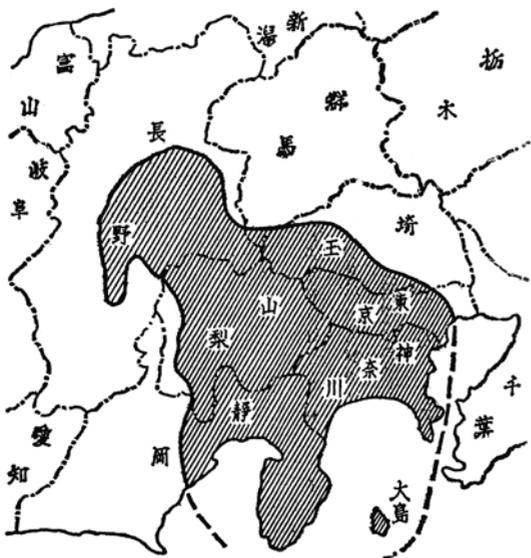


図3・勝坂式文化圏  
八幡一郎は、勝坂式に特徴的な有孔鏝付土器の分布域を文化圏ととらえた。それは鳥居龍蔵が示した「山岳狩猟民」の地といえる。

しばらく進むと、八ヶ岳の裾野が西方をさえぎり、編笠山と鼻戸屋（鼻戸山）を結ぶ裾野にいたる。飛驒の山脈が望まれ、諏訪盆地の所在が知れる。さらに立場川を越せば、諏訪湖を指呼することが出来る。信州に育った自分でさえ、ここまで来ると、安堵とともに帰ってきたと一息つく瞬間である。

一方、松本平や伊那谷方面からやって来ると、塩嶺峠ほかの峠の頂きに達する。そこからは波静かで鏡のように蒼白く輝く諏訪湖を見下ろせる（図4）。その湖面のむこうには、北に八ヶ岳の峰々が立ちならび、稜線のもっとも低くなったあたりが富士見高原で、その南のかなたには秀麗富士がぼっかりと浮かんでいる。

四方を山にかこまれ、富士山と諏訪湖にはさまれた、この海拔一〇〇〇メートルの地は、まさに理想郷というにふさわしく、五〇〇年前、列島でもっとも繁栄した山岳民族の集うところだった。



図4 ● 塩嶺峠からみた諏訪盆地と富士山

眼前に諏訪湖が広がる。その後方、左手（北）が八ヶ岳で、稜線がなだらかに下がり、南麓となっている。稜線のもっとも低くなったあたりが富士見の高原。その南には、ぼっかりと秀麗富士が浮かぶ。